

当報告の内容は、それぞれの著作の著作物です。Copyrighted materials of the authors

## 報告書

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドネット・ラウンジ企画

### アフリカにおける日常世界と武力紛争の記憶に関する学際的研究

2014年3月1日(土) 13:00-17:00

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所306MM セミナー室

#### ●概要

アフリカ各地の武力紛争は、誰によって、どのように記憶され、また語られるのだろうか。本ワークショップではルワンダ、シエラレオネ、ソマリア、ナイジェリアにおける紛争を取り上げ、国民国家、コミュニティ、地域住民、ディアスポラ、小説家といった紛争の「語り手」の複数性を考慮しつつ、各地の紛争に関する物語の再編の可能性と課題を探った。各地域で調査を行ってきた4名の若手研究者による報告の他、ゲスト・スピーカーとして峯陽一氏(同志社大学教授)と落合雄彦氏(龍谷大学教授)、司会に鶴田綾氏(エディンバラ大学大学院)を招聘し、フロアの質疑応答も交えて参加者全員での活発な意見交換を行なった。当日は総勢40名程が来場し、盛況に終わった。

#### ●報告要旨

	報告1(片山) ルワンダ	報告2(澤) シエラレオネ	報告3(須永) ソマリランド	報告4(玉井) ナイジェリア
地域区分	中央アフリカ	西アフリカ	東アフリカ	西アフリカ
年代	1990-1994	1991-2002	1980's-現在	1967-1970
「語り手」の世代	紛争の直接的な経験者(同世代)			戦後生まれ(次世代)
分析対象	住民の語り	TRC	クラン/政府/ディアスポラ	小説
個別の問題	国民和解	国民和解/国家建設	国家建設	記憶の継承
大きな問題意識	アフリカにおける紛争後の「和解」と国家建設において、多様な語り手による紛争をめぐる「記憶」が蔑ろにされている			
大きな問い	アフリカにおける紛争の「記憶」の複数性と多元性を踏まえ、紛争と国家、国民を語り直す。			

記憶：過去を認識しようとするあらゆる営み、そしてこの営みの結果得られた過去の認識のあり方<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 小関隆ほか編(1999)『記憶のかたち』柏書房。

## 報告内容の概要

### 1. ルワンダ紛争 1990～94 : ジェノサイドの記憶をめぐる政治力学

片山夏紀（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

1994年に勃発したルワンダ・ジェノサイドの当事者たちは、ジェノサイドをどのように記憶してきたのか。本報告の目的は、報告者が現地調査で収集した語りを、Buckley-Zistel, S. (2006)の「選択的忘却」(chosen amnesia)という視点から分析し、農村で共存するジェノサイドの被害者と加害者の記憶をたどることである。当事者たちがジェノサイドの何を記憶し、何を忘却していくのかを模索することによって、ルワンダ社会が孕むエスニシティの社会的対立構造の問題を明らかにする。

### 2. シエラレオネ紛争 1991～2002 : 赦すこと、忘れること

澤良世（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

紛争が長く続いたシエラレオネにおいて、人々が尊厳を取り戻し、癒され、和解を実現し、紛争の再発を予防するという途方もなく大きな責任を地域社会や個人だけに委ねることが正しいのか、あるいは可能なのだろうか。本報告の目的は、真実和解委員会（TRC）が人々の紛争の記憶に及ぼした影響を検証することである。TRCの先行研究を整理した上で、報告者はTRCに肯定的な評価を下す。TRCを今後も続く「長いプロセス」と捉えることによって、TRCの経験が紛争の記憶に与えた影響を正しく評価することができるであろう。

### 3. ソマリア紛争 1980年代～現在 : 「ソマリア紛争」とは何か？

須永修枝（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

国際的に主権国家として認められていない未承認国家ソマリランド誕生の背景にある「ソマリア紛争」に対し、どのような取り組みがなされてきているのか。本報告では、クラン（氏族）の長老、ソマリランド政府、さらにディアスポラを取り上げつつ、未承認国家ソマリランドの存続および独立承認に際して、「ソマリア紛争」をめぐる記憶が孕む緊張関係を示す。未承認国家の国家建設が「統一」を希求するものであることを鑑みると、ソマリランドの国家建設を進めるに際して、依然として「ソマリア紛争」に対してどのように向き合っていくのか大きな課題である。

### 4. ビアフラ戦争（ナイジェリア）1967～70 : 「ビアフラ戦争」をめぐる記憶の政治学

玉井隆（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

本報告では、ビアフラ戦争を直接的に経験していない世代の人びとが、今後どのようにビアフラ戦争の記憶を想起しまた語り継いでいけばよいのかを、ビアフラ戦争を扱ったチママンダ・アディーチェの小説Half of a Yellow Sun（邦題『半分のぼった黄色い太陽』）におけるビアフラ戦争についての語られ方の分析から検討する。分析の手がかりとして「シングルストーリー」という問題意識を用いながら、記憶が「真実」か否かを追求するのではなく、またビアフラ戦争の「忘却」や「悲惨さ」ばかりを扱うのでもない、ビアフラ戦争の複数の多元的な記憶が相互に交流され得ることが必要であることを指摘する。

## ●コメント

### 1. 峯陽一氏（同志社大学教授）

報告は「記憶、日常世界、アフリカ」をキーワードとしているが、4名の報告を踏まえると「忘却、国家形成、アフリカに限定されない地域」というより大きなテーマが裏にあるのではないか。忘却/記憶を行うのは誰か、それはどのように引き継がれるのか、その背景にどのような権力が潜んでいるのかを考える必要がある。また国家形成の過程で、国家はどのような記憶を形成するのか、そして人々がその記憶をどのように日常に落とし込んでいくのか、さらにはどのような国家が望まれるのかを意識する必要がある。さらに、ディアスポラのように国境を超える人々が国家の記憶形成に与える影響、日本語で、日本で、アフリカにおける紛争の記憶を考えることの意義を検討する必要がある。

### 2. 落合雄彦氏（龍谷大学教授）

このワークショップで重要だと考えられるがあまり着目されていなかった点について、3点述べる。1つ目は、「歴史」をどう扱うのか、記憶との関係で位置づけるのかという点。今回扱っている記憶の構造的な位置づけを示さなければ、何でも記憶として扱って良いこととなる。2つ目は、「非選択的」な記憶がある意味で紛争の記憶研究の核ではないかという点。例えば「選択的忘却」があてはまらない記憶、つまりジェノサイド、震災、そうした暴力と言える絶対的に不条理な状況下に巻き込まれた人々は、意図的に忘却したり記憶したりすることすらできないのでは。3つ目は、紛争の記憶とは、言葉にならないものも含んでいる点。報告では人々の語りや証言が扱われていたが、紛争を言葉によって「全て」語ることは誰にもできない。語り手は語ることで／証言することで etc. 「納得」ができるが、紛争の記憶を「全て」は語れない。こうした言葉にならない記憶をどのように扱うのかは、紛争の記憶を検討する上で重要ではないのか。